

記念大会が示した情報処理の未来

- 情報処理学会創立50周年記念(第72回)全国大会報告 -

50周年記念全国大会を振り返って: 7,150人もの多くの方々に ご参加いただきお礼申し上げます。

喜連川優 (組織委員会委員長/東京大学生産技術研究所)・山本里枝子 (組織委員会副委員長/富士通)・
中野美由紀 (組織委員会副委員長/東京大学生産技術研究所)

情報処理学会 50 周年記念全国大会は 7,150 名という過去の大会に比べると突出した参加者数を得ることができた(図-1)。その慌ただしい1年半を振り返ってみることにする。

リーマンショック

喜連川は 2008 年 5 月に情報処理学会副会長に選出され、それと同時に、50 周年記念大会組織委員長のお役目を頂戴することとなった。全国大会の組織委員長は副会長が務めることとなっており、たまたま、50 周年目の開催時期に副会長となったこと

から 50 周年記念大会組織委員長を拝命した次第である。当該時点ではリーマンショックの前で、IT 産業もそこそこ持ち直していたため、種々ご寄付をお願いすることにより 50 周年的な賑やかさも実現できるであろうと気楽に考えていたが、同年秋にリーマンショックが起り、企業は大幅な緊縮財政を強いられることとなった。大会は 2010 年 3 月、すなわち、2009 年度末であるため、2008 年度内をお願いをする必要があったが、財布のひもは想像を絶する程にきわめて堅く、大きく方向転換をすることとした。すなわち、本会は過去長期にわたり企業からの会員が大きく減少してきており、景気低迷下において寄付をお願いすることは企業の学会離れを一

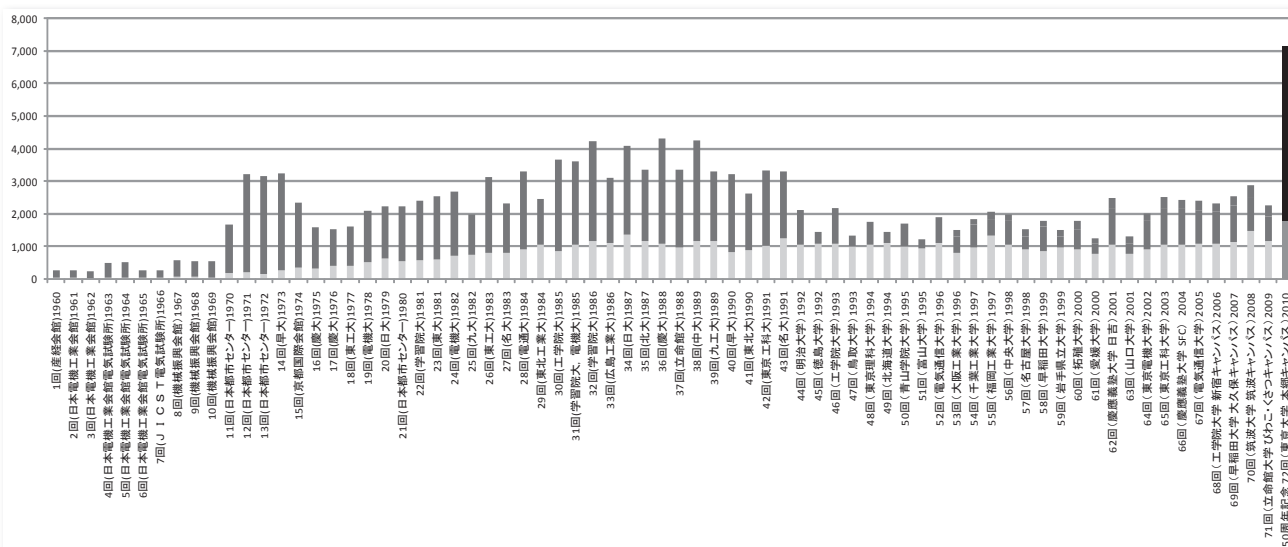


図-1 第1回からの全国大会参加者数推移(上が聴講者+招待者, 下が講演者)

層加速する原因にもなりかねないとの判断から、50年という節目ではあるものの「質素に徹する」ととし、執拗な寄付のお願いは一切控えた。もちろん厳しい状況の中で頂戴したご支援は大変有難く、サポートいただいた数々の企業には感謝に堪えない。

スローガン「コンピュータの無い社会を考えられますか？」

組織委員会の役割の1つはスローガンの決定である。50周年という節目において、何を記念大会開催の目的とするかについて考えあぐねたが、やはり、長い目で見ると、いわゆる「若者の情報離れ」を食い止めることが最も重要であると考えた。日本のGDPの成長の根幹を支えて来たのは情報通信産業であり、今後の国益を考えると、情報分野の人材育成こそが最重要課題であることは言を俟たない。通常の大会ではおおむね70%の参加者が学生であることから、学生目線で「コンピュータはやっぱりすごい」と改めて感じられるような企画とすべきと考え、スローガンは、「コンピュータの無い社会を考えられますか？」としてみた。きわめてシンプルな一文ではあるが、目に触れることが少なくなりつつあるコンピュータではあるものの、社会の基盤を支えるその底力を再認識しようという思いを込めた次第である。組織委員会のメンバの方々からご賛同をいただき、決定した。

鳩山衆議院議員からの祝辞

50周年記念全国大会開会式は鳩山衆議院議員の祝辞から始まった。3月という国会会期中でもあり、代読となったことは致し方ないものの、情報分野への大きな期待と励ましのメッセージを頂戴できたことは意義深かったと言える。その実現に際し、非常に多くの方々から長期にわたるご支援を頂戴した。情報分野を元気にしようという気持ちを共有いただき、惜しみなく膨大な努力を払って下さった方々に心よりお礼を申し上げたい。

50周年という節目に相応しい企画

全国大会は組織委員会、プログラム委員会、実行委員会の3つの組織から構成される。プログラム委員会は、プログラムの編成にあたるが、主として2つの役割がある。一般論文募集の調整、ならびに、論文発表とは別の特別講演企画などを行うことである。通常後者の企画はそれほど多くはなく、3から4トラック程度であり、この数字はFITでも同様で、あまり多くすると参加者が散逸してしまい企画への参加者数を最低限確保したいという配慮がある。今回の50周年記念全国大会では、17イベント会場にて、のべ66件という非常に多くの企画をプログラム委員会の多大な努力で実現することができた。この数は、実は東京大学における使用可能な大きな会場の数に大きく依存した数とも言える。一般に大学の構造は必ずしもイベント開催に適しているとは言えず、大きな講演会場はそれほど多くはなく、大きな教室はほぼ使い切った。通常よりもはるかに多くの企画を情報の広い分野から偏り少なく調整することは未曾有のチャレンジであり、通常プログラム委員長は1名であるが、3名の方々にお願いすることとした。坂井(東大)、西田(京大)、丸山が担当した。本会では産のアクティビティにもより注力しようとの考えから、2004年よりソフトウェアジャパンなるイベントを行ってきた。例年1月に開催をしていたが、50周年であることから、パワーを集中化すべく記念全国大会中に同時開催をすることとした。これにより、結果的に、産と学がうまくバランスのとれた多様な企画を展開することができたと言える。

東京大学の会場は安田講堂が最大規模で1,000名以上のキャパシティを有する。それ以外にも法文1号館など巨大な教室がある。大規模な会場に関しては、プログラム委員会と組織委員会が機動的に連携することにより、2010年3月の開催時点において旬となる企画を時の流れを読みつつ調整して進めて行った。たとえば、「来るべきクラウドコンピューティングの世界」なる企画は非常に多くの事前



図-2 Fran Allen 氏の講演風景



図-3 濱田純一氏の講演風景

申し込みを頂戴した。クラウドというキャッチーなテーマに関し、3月時点でのホットな話題を捕捉し、宮原 NICT 理事長に加えて、VMware 創始者 Mendel Rosenblum 氏、OGA より Charlie Catlett 氏、Yahoo! より Owen O'Malley 氏等多くの海外からの講演者をグローバルクラウド基盤連携技術フォーラム (GICTF) や Yahoo! Japan のご支援を頂戴しながら招くことができた。

2010年2月号情報処理学会誌に掲載されたプログラムは、43ページにおよび、このプログラムを見て、その圧巻さに称賛の声が多く寄せられた。このプログラムにそそられた参加者も多くおられたのではないと思う。これだけのプログラムの作成にご貢献いただいたプログラム委員会の皆様、加えて、全国大会に共催、協賛いただいた学会（言語処理学会、電子情報通信学会情報・システムソサイエティ）、特別講演企画に共催、協賛いただいた各学会、団体（社会情報学会、電子情報技術産業協会、IEEE Japan Council WIE、情報サービス産業協会、情報オリンピック日本委員会、人工知能学会、東京大学男女共同参画室）を始め非常に多くの方々のご支援に深くお礼申し上げたい。

女性初チューリング賞受賞者 Fran Allen 氏、ならびに濱田東大総長による講演

50周年という節目にしか聞くことができないような基調講演をという気持ちから、組織委員会は女

性初のチューリング賞受賞者である Fran Allen 氏 (IBM フェロー) をお願いをした (図-2)。その調整には日本 IBM の岩野氏に大変お世話になった。講演「The Challenge of Multicore」は、1,000CPU コア時代がまもなく来る状況を Parallel Hammer という言葉で表現され、「eliminate cache」と方向感を示唆されるなど大変刺激的な講演であった。年齢を感じさせることのない熱気に溢れたお話に対しては会場から多くの質問が出たが、大変丁寧にご回答いただいた。Fran 氏はダイバーシティパネルにおいても40分以上の延長という白熱した議論にも参加いただき、女性研究者にとって大変勇気づけられるエネルギーを頂戴した。

加えて、東大の情報学環なる組織の長から総長になられた濱田教授に「情報に対する権利」なるご講演を頂戴した (図-3)。斬新な情報技術であればあるほど、社会展開をする際に最も悩まされるのは法律であることは周知の事実であり、「情報の価値」の変化から解きほぐし、現状認識に至るご講演は本会50周年に相応しい深い内容のご講演であった。とりわけ、新しいITサービスは多方面で法的な問題と直面することが多く、時宜を得た講演トピックスとなり、会場一杯の聴衆を得た。

御殿下グラウンドなどでの「今ドキッのIT」デモ

百聞は一見にしかずとの考えから、とにもかくに

も迫力のある IT を見せようと考えた。過去の記念大会では創成期のコンピュータを展示したこともあったが、今回は緊縮財政の中で、次世代を担う学生に、過去からの道のりを見てもらうよりも、先端の「今」を感じてもらいたい、「次」を感じてほしいというのが組織委員会の委員からの意見であった。大規模な情報系国家プロジェクトの現状、NHK、ATR、NICT、AIST 等の最新の研究成果などを肌で体感できる場を設けることは、大きく若者にアピールするはずであろうとの考えからデモ会場を設けることとした(図-4)。3面のバスケットボールコートが入る御殿下記念体育館なる大きな空間が数多くのデモで埋まった。NHKによる3Dシアタなどの大規模な展示に加え、ITアートや、ロボット競技など、大きなステージを活用した楽しめる素材も多く準備したことが功を奏し非常に多くの見学者を得ることができた。NTTからは遠隔高臨場感通信プラットフォーム t-Room を工学部11号館で、NHK放送技術研究所は工学部2号館でデモを行い、いずれも大変盛況であった。これらは、搬送や調整がとて大変なものが多い中、前夜からのタイトなスケジュールの中で大変ご苦労いただいた。深く印象に残るすばらしい出展を実現するためにどれほど膨大なエネルギーが必要かを改めて感じた次第である。ロボットやステージでのITアートはメディアにも取り上げられた。これもひとえに、「50周年なんだから」という気持ちにご共鳴いただき多くの方々に頑張っていたいただきその熱気が伝わったゆえんと言えよう。

なお、「今ドキッのIT」のような大規模なデモは、通常の全国大会ではなされておらず、プログラム委員会とは別組織によって独立に相田仁委員長とともに中野美由紀が担当し運営した。

聴講費の無料化

発表者に対して論文投稿料は課すものの、講演聴講料は無料とすることとした。この機会に、情報処理学会会員ではない方々に、情報処理学会のアクセ



図-4 「今ドキッのIT@御殿下記念館2010」会場風景

ィビティをご覧いただき、理解を深めていただくことが何よりも大切と考えた次第である。50周年事業に対して情報処理学会は積立金を用意してきた。この無料化は大変有効であり、予想以上に非常に多くの方々にご参加いただくことができたことは大変喜ばしい限りである。

プレイベント ならびに ポストイベント

前週には学術会議情報学部会による情報学シンポジウムが乃木坂で開催された。数多くの登壇者が、「この議論の続きは来週の全国大会で」と発表を締めくくするなど、記念全国大会は開催以前から大きく盛り上がっていたことは忘れられない。

3月8日(月)にはプレイベントとして経済産業省平成21年度情報大航海プロジェクトの成果報告会がなされ、商務情報局石黒局長の挨拶に始まり、フランス国策検索エンジン「クエロ」のプロジェクトリーダーによる講演もあり、TVニュース報道もなされた。さらに3月12日(金)にはポストイベントとして、10ペタフロップスを狙う国家基幹スパコンプロジェクトシンポジウムが文部科学省、理化学研究所の共催で開催され、立花隆氏の講演とともに、スパコンの技術の詳細が初めて披露された。並行して、文部科学省特定領域研究「情報爆発IT基盤」シンポジウムも開催され、マイクロソフト社D.Gannon氏

より Azure クラウド資源の情報爆発プロジェクトへの提供、ならびに、Azure による産学連携の世界での現状について発表がなされた。記念全国大会は3月9日から11日の3日間であり一般講演はこの3日間に設定した。プレ・ポストイベント時には一般講演はないものの、プレ・ポストを含めて全体をIT コリドーと名付け、情報系のイベントを継続的に設けることによって、当該週には、いつ立ち寄っても何らかのイベントが開催されている情報系で満ち溢れた1週間を作り上げた。

言語処理学会との共催

学会にとって大きなイベントを実施することは多大な負担であり、今後なるべく light weight にしてゆくことが望まれる。とりわけ、国立大学は法人化後、いわゆる雑用が増えたことは統計でも明らかにされており、若手研究者にとって学会の活動まで手が回らないという事態も増えてきている。言語処理学会はたまたま本会と同じく例年3月に大会を開催していたことから、共催することにより、互いの学会のロジスティクスを可能な範囲でコンソリデート・共有化することにより手間の削減が実質的に可能かどうかをこの機を利用し実験を試みた次第である。その実現にはとりわけ言語処理学会の鳥澤氏、宮尾氏にお世話になった。申し込み Web も会場での受付も一本化した。講演の形態は両学会で大きく異なり、また、多くの企画をうまく調整する手間は必要であるなど、それなりの労力がかかるが、たとえば、チューリング賞受賞者クラスの招待の調整はなかなか大変であり、やや専門分野は異なるものの、言語処理学会の会員にも視野を広めていただくことができるのではないかと考えた次第である。言語処理学会の大会は非講演者の参加が大変多い非常に活気のあるすばらしい運営がなされており、情報処理学会にとってはパーティカルコミュニティがいかに機動的に運営されているかを垣間見る良いチャンスでもあった。安田講堂の利用も言語処理学会と共有

し、長尾国立国会図書館長より「これからの言語処理とその応用」なるご講演がなされた。

盛り上がり推移

図-1 から明らかなように、最盛期には4,000人を超すこともあったものの、ここ十年間を見ると、全国大会の参加者は2,000人強、最大でも3,000人弱であった。そこで50周年記念ということから、語呂合わせで当初5,000人の参加者を目標に据えた。例年、参加費は有料であり、事前申し込みからその参加者数を予想することが可能であるのに対し、今回は無料としたため、まったく予測が立たない事態となった。とりわけ、受付の混雑を避けるべく無料とは言え Web から事前に申し込みをし、それを印刷して持参することを強くお願いすることとした。計測は2月から開始したが、その推移を図-5に示す。事前に、約1,800名の論文講演者ならびに、当該講演時のセッション座長、そして、特別企画での招待講演者などの人数は学会が捕捉していたため、聴講のみの参加者数を推計しようとしたが、実際には、申し込み不要な講演者も申し込みをされたり、正確な数値は丁寧にチェックする必要があるものの、概要把握には事前申し込みはきわめて有効であった。図-5に示されるごとく2月当初は1,000名の申し込みしかなかったが、それ以降記者会見、twitter、Yahoo!、日経BPサイト等を始め多様なチャンネルで呼びかけることにより、開催までの1カ月間に3,000名以上、すなわち、平均すると100名/日の申し込みが実現された。7,150という総参加者は申し込み用紙の総数であり、確実に受付を済ませた人数と言える。現実には、受付を経由せずとも聴講可能であり、実際の参加者はさらに多かったものと推察される。さらにインターネット中継をしたセッションも複数あり、実質的な総参加者はそれ以上に多いものであったに違いない。逆に考えると、実質的なプロモーションは1カ月でしかなく（これはプログラムの特別企画数があまりに多く、講演者な

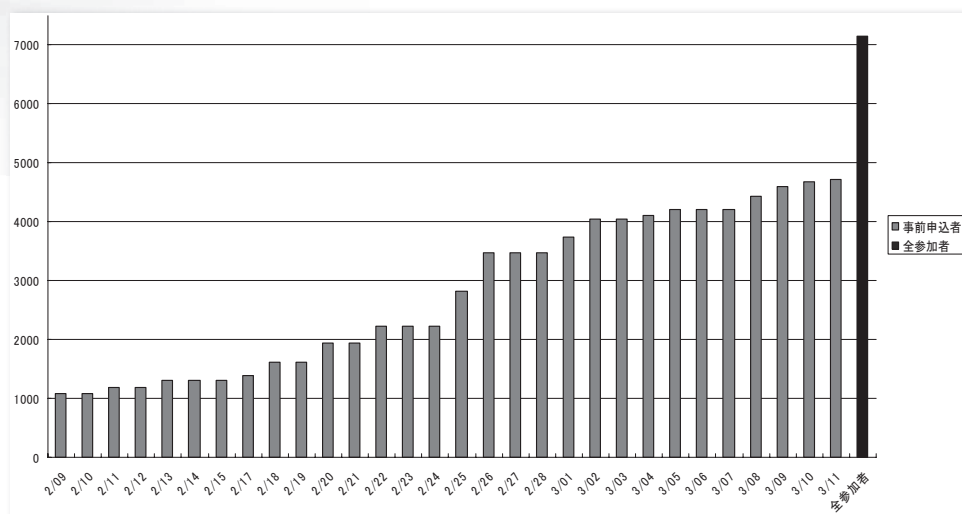


図-5 聴講参加者申し込み数の推移

どの確定に大きな遅滞が発生したことによる), もっと前から積極的な周知をしていれば, より多くの参加を得られた可能性は大きい。一方, 大会3日目は東大入試合格発表日であるなど, 7,000名は大学の受容可能容量として限界であったやもしれない。大きな不具合がなく無事大会を終えることができたことに何よりも安堵した次第であった。

もしれない。その実現には, 組織委員会, プログラム委員会, 実行委員会, プログラム編成WGにとどまらず, すでに述べたごとく, 非常に多くの方々のお力添えの賜物と言える。同時に, 情報処理学会事務局においても, 鮎川氏が何日にもわたり夜を徹して多大な作業にあたった。その情熱が本記念大会を底辺から強く支えたことは特筆に値する。

(平成22年9月14日受付)

多くの方々のご支援に深謝いたします

開催場所に関しては, 多くの方々から東京大学本郷キャンパス, とりわけ, 安田講堂での実施に関してのご要望を頂戴し東大を選定した次第である。東京大学での実施にあたっては, 東大本郷のほぼすべての大きな会場を借り切ったが, その際, 総長, 副学長, 工学系研究科長, 情報理工学系研究科長, 情報学環, 法学部, 経済学部, 理学部, 情報基盤センター, 運動会, 本部など非常に多くの方々ならびに組織に大変お世話になった。また, 会場の調整, 準備に加え, 雪もちらつく初日には電気ストーブを総動員するなど機動的な運営には近山理事, 原田達也氏を始め多くの実行委員会の方々を全力を尽くした。今回の50周年記念全国大会は数多くの初めての挑戦を行った。7,000名を超えるイベントを大きな支障もなく手作りで実現できたことは驚くべきことか

■喜連川優 (正会員) kitsure@tkl.iis.u-tokyo.ac.jp

本会フェロー, 本会前副会長 (2008 ~ 2009), 東京大学生産技術研究所教授。国際戦略情報融合研究センター長, 東大地球観測データ統合連携研究機構長。データベース工学の研究に従事。文部科学省特定領域研究「情報爆発IT基盤」領域代表 (2005 ~ 2011)。infoplosion/twitter

■山本里枝子 (正会員) r.yamamoto@jp.fujitsu.com

本会理事 (2008 ~ 2009)。富士通研究所ソフトウェアイノベーション研究部部長。ソフトウェア工学の研究開発に従事。

■中野美由紀 (正会員) miyuki@tkl.iis.u-tokyo.ac.jp

東京大学理学部情報科学科卒業。博士 (情報理工学)。1985年東京大学生産技術研究所助手 (2004年助教)。2008年特任准教授。データベースシステム, ストレージシステム, データ工学の研究に従事。電子情報通信学会, IEEE, ACM, 日本データベース学会各会員。